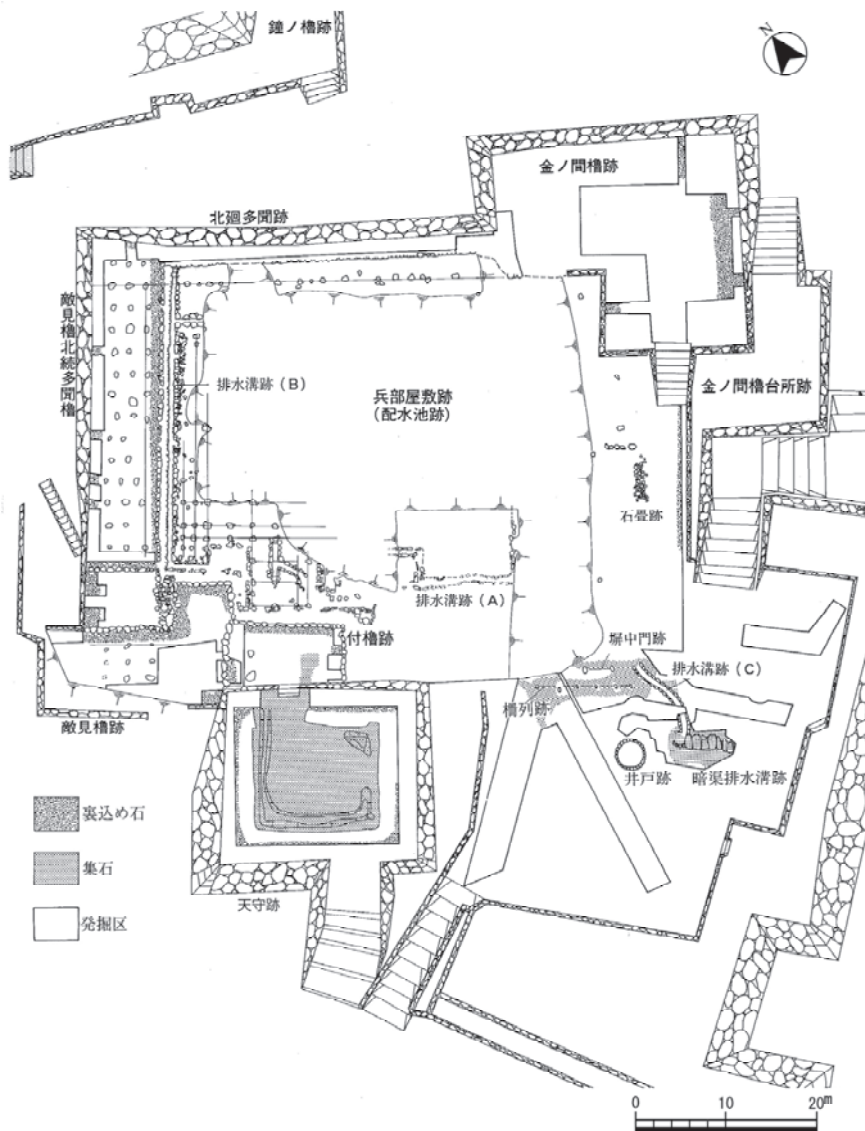




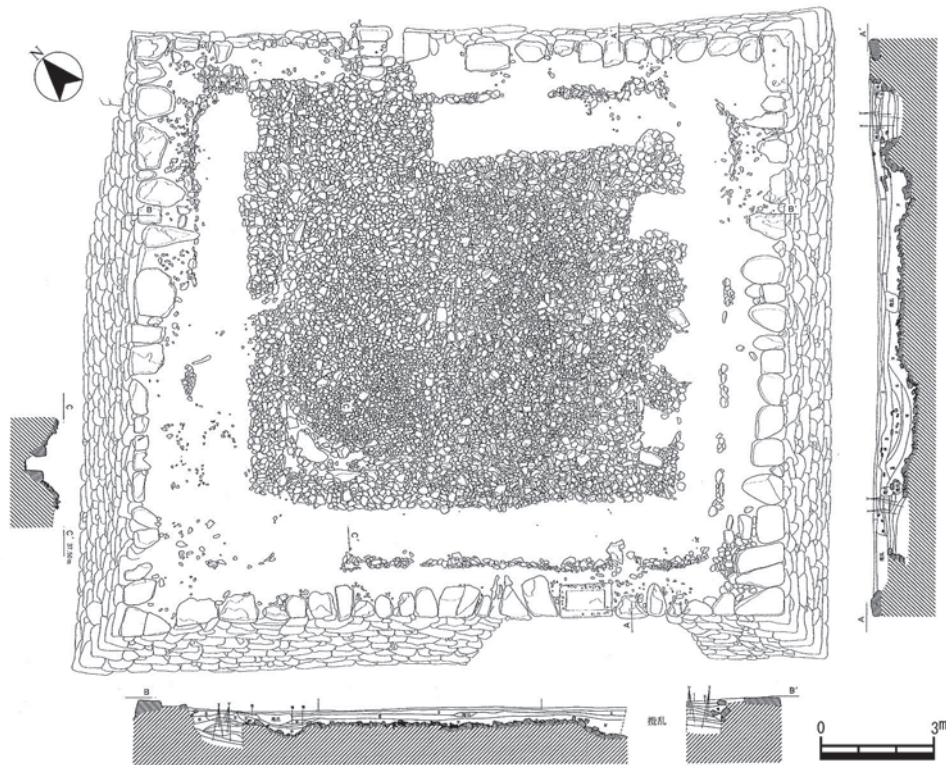
本丸跡上段遺構略測図

3-3 遺構の概要

史跡松坂城跡の本丸跡上段を調査対象とした平成元年・2年度の発掘調査により、配水池の設置されていた中央部の兵部屋敷跡は遺構面が大きく削平されていたが、絵図等資料により想定されていた建物の礎石や集石遺構が確認されている。以下各地区毎に遺構の概要を示しておく。

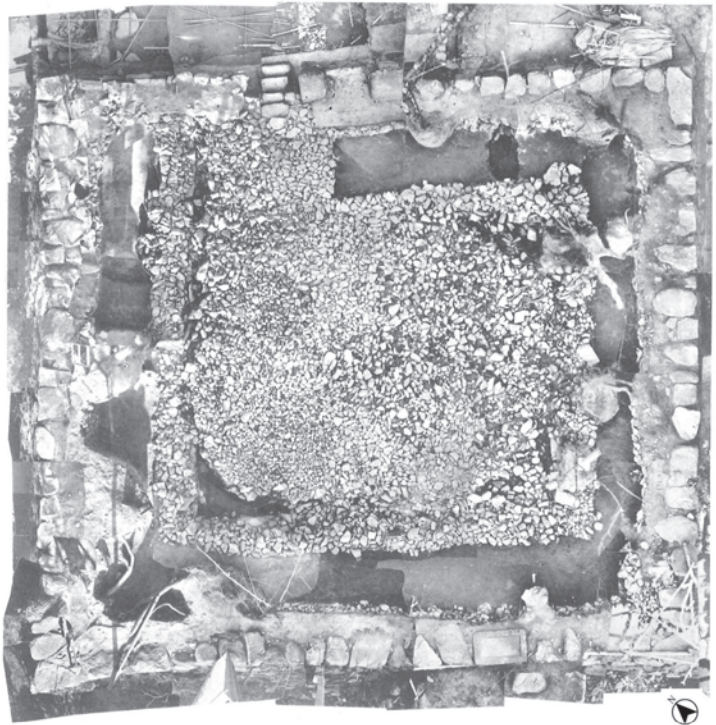
(1) 天守跡

天守台の規模は、上場で北辺17m、南辺17.4m、東辺15.4m、西辺16mを計る。中央部の長さは、東西16.8m×南北15mと各辺の中央部が弓状に内側に少し凹んでいる。高さはきたい丸に面する西から南側にかけてが一番高く、約6.4mある。これは、「勢州松坂城図」にある「長九間、横八間、高三間」という記述とほぼ一致する。石垣は、自然石の乱積で、出隅には割石が用いられ、二ノ丸等の石垣に比べ古い積み方で算木積みへの移行の様子がうかがえる。石垣の天端石はどれもほぼ平らで、おおよそ標高37.9mである。天端石の背面には1.8～1.9m幅に人頭大から拳大の裏込め石が詰められていた。



天守跡実測図(1:200)

天守跡の中央では人頭大から拳大の栗石がびっしり敷かれた集石遺構が検出された。集石遺構の各辺はほぼ石垣の辺に沿った長方形で、東西11.5m×南北9.6mの規模であった。ただ、北辺の西端から2.5m幅では石垣北辺の裏込め石まで出っ張って繋がっていた。ボーリング調査の結果、集石の深さは0.9mあることが判明した。表面は全体ほぼ一定の高さであったが、北東隅付近と南辺と西辺に沿って、幅が上場で1m前後、下場で0.2～0.6mの溝状を呈する部分があり、深さは最も深い南西隅付近で0.9～0.8mあった。溝の南西隅底やこの底に接した側面に表面平らな石があり、最も大きいもので長さ1.2m、幅数10cmもあった。溝底の所々では瓦片も見られた。集石から裏込め石までの1.0～1.4m幅には、それほど堅くしまっていないが黒茶色粘土質と灰茶色砂質土とがほぼ交互に版築されており、石材はまったく見あたらなかった。



(2) 付櫓跡

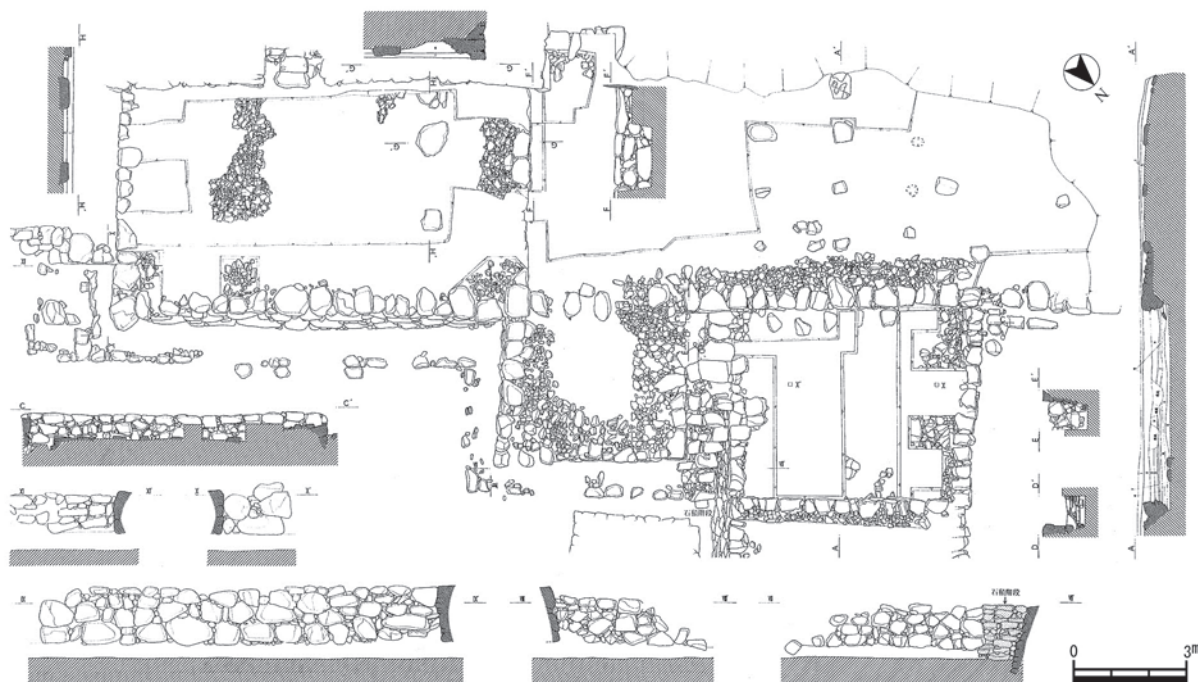
付櫓跡の石垣上場は、天守台上面より1.5m低く、南辺が天守跡に、西辺が敵見櫓跡に接する。規模は南北6m、東西11mで、敵見櫓跡との境は石垣になっていた。この境の石垣に沿って、1辺1mと0.6mの上面平らな石が南北方向に2mの間隔をおいて2石並んでいた。これらの石から付櫓跡の北辺の石垣までと天守の石垣までも約2mである。2つの石は、形状から見て礎石であると思われる。しかし、ここに何らかの建物が建っていたとすると、これらの石に対応する石が欲しいところであるが、これらの石以外には石も抜き取り穴も確認することはできなかった。東寄りに人頭大から拳大の集石を確認した。調査中に大量の雨が降っても雨水は溜まることなく、ここから沁み込んでいったことなどから、一種の配水施設ではなかったかと思われる。

北辺の石垣は矩をもって積まれているのに対して、敵見櫓跡との境である西辺の石垣は矩をもたずに直に積まれていた。東辺には現在石積の階段が付いている。この階段は、最下段の周辺の表土が階段の下に潜り込んでいるところから、築城時にはなかったものである。

(3) 敵見櫓跡

付櫓跡の西に隣接して、付櫓跡と同じ高さで続いている。規模は推定で東西16m×南北7.5m、きたい丸からの高さは上面が全体に西方向に傾斜しており一定ではないが、およそ5m程あった。北辺の東寄りには東西4.8m南北4.2mの張り出しがあった。

付櫓跡と敵見櫓跡との境の石垣は西側(敵見櫓側)を正面にして積まれていた。付櫓の石垣を築いた後、付櫓跡西辺の石垣に接続して敵見櫓跡の石垣を積んでいる。付櫓跡の西辺の石垣は一つ一つ郭を独立できる位に頑丈に造り上げたり、縄張りをはっきりさせたりするためのもので、初めから埋めてしまう予定の石垣であったようである。このように埋められている石垣は、敵見櫓跡とこれに続く多聞櫓跡との境など所々で見られ、見えている石垣のほとんどが矩を設けて積まれているのに対し、ほぼ垂直に積まれている。付櫓との境の石垣と張り出し部東辺の石垣最上段は南北方向に一直線に並ぶ。裏込め石は見えている石垣も隠れている石垣も、上段の石の先端から1.5m幅に拳大から人頭大の石がしっかり詰められていた。



敵見櫓・付櫓跡実測図(1:200)

中央部には原位置を保っていると思われる礎石8個が残っていた。柱間は桁行方向が2.25m、梁間方向は1.5m間隔で並んでいた。礎石は幅0.3～0.8mで上面平らであった。そのほとんどが割石を利用していた。東の方の礎石は大きな松の木のため、確認できず、また、西の方は石垣が大きく崩れているために消失してしまったものと思われる。

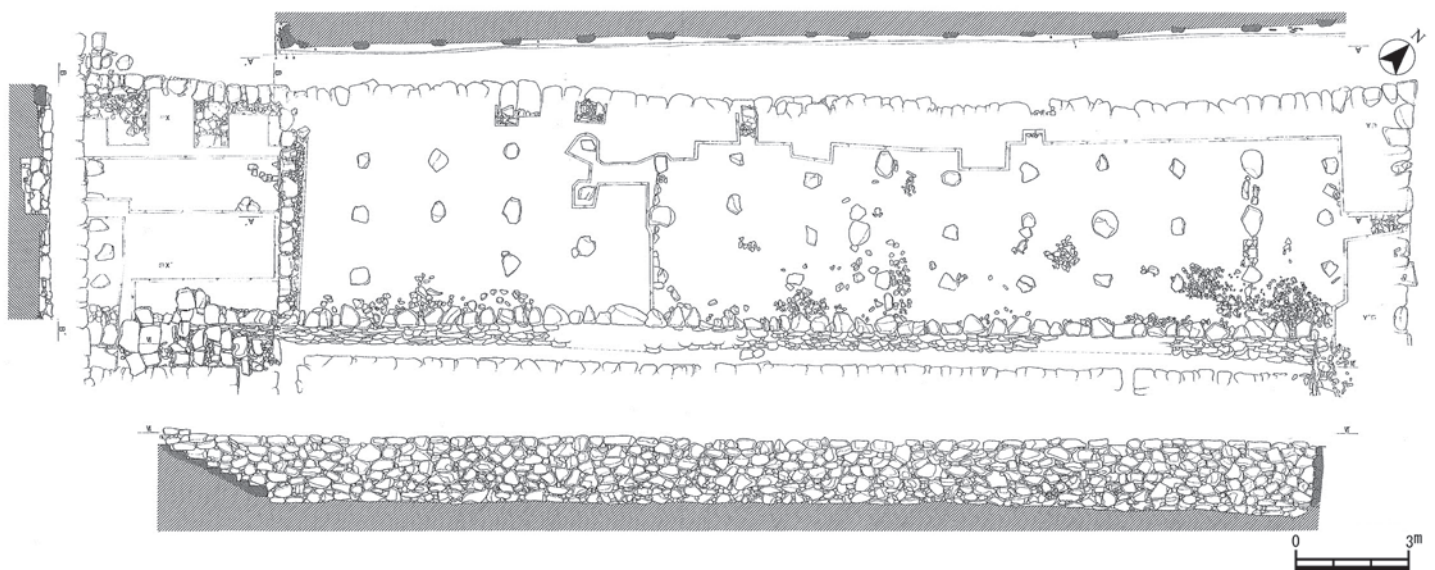
なお、出土遺物としては大量の瓦片があった。瓦片のほとんどは平瓦や丸瓦である。瓦以外では石垣北辺の中央近くで、表土直下から釘隠しとして用いられていた金銅製の六葉金具が出土した。1m範囲内に六葉、菊座、樽の口の一式が確認された。これら三体はセットとなるものと思われる。

(4) 敵見櫓北続多間跡

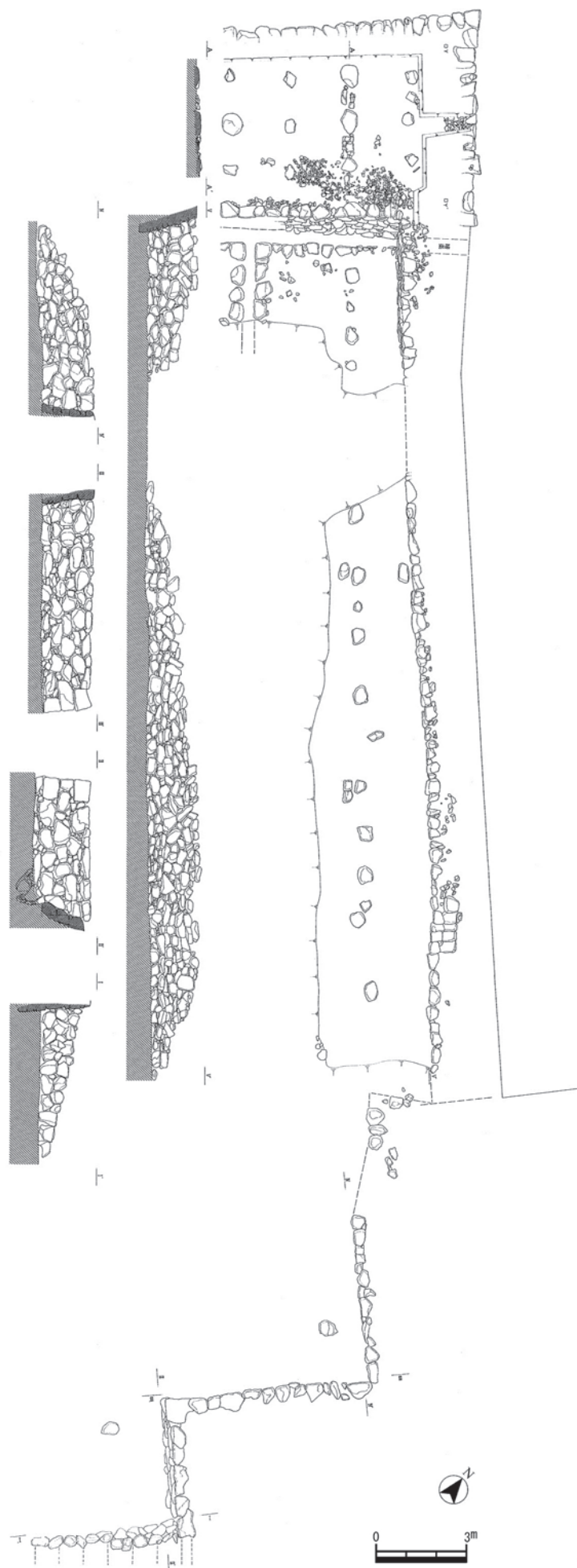
敵見櫓跡から北方向に延びる幅6m、長さ35mの多間跡である。西辺の石垣は中央部で少し弓状に内側に湾曲する。西辺の石垣は高く積み、高さ5m前後ある、石積の方法は天守跡等と同じであった。石材には、一辺40cm前後の石材が使用されていた。これは大きい建物を支える天守跡や敵見櫓跡等の石垣の石材より一辺が30～50cm小さい。裏込めには、石垣最上段で石の先端から1～1.5m幅に拳大から人頭大の石が詰められていた。

敵見櫓との接続部から北へ5mの所には敵見櫓の北辺の石垣と向かい合うように、高さ0.6mの石垣が垂直に積まれていた。石垣の先端から1m幅には、人頭大程の裏込め石が詰められている。敵見櫓の石垣からこの石垣までの間には、多間に関わる礎石は確認できなかった。敵見櫓石垣のすぐ北側で石垣の上場より0.6m下がった面には、石垣に沿って上面平らな石材が0.75mの間隔をおいて5個一列に並んでいた。

南を正面にした低い石垣から北辺の石垣までの30mの間に、規則正しく礎石が並んでいた。礎石は東西方向である梁間には3石、南北方向である桁行には14石並んでいた。それぞれの礎石間は梁間が1.5m、桁行が2mあった。礎石のある部分の規模は「勢州松坂城図」にある「長十四間、横三間」に近い数字であることから、敵見櫓に続く5mは敵見櫓とを繋ぐ部分で、いわゆる渡廊下等があったとも考えられる。礎石は上面平な割石あるいは自然石を利用している。大きさは幅30～75cmと定まっておらず、形もまちまちである。礎石は一部抜かれたり動いたりしているが、地中深く埋められていないにもかかわらず保存状態は良く、そのほとんどが原位置を保っていると思われる。



敵見櫓北続多間跡実測図(1:200)



北廻多聞跡実測図(1:200)

敵見櫓跡の北方向への張り出しと北続多聞跡との間に、敵見櫓跡から兵部屋敷跡に続く幅1m足らずの9段の石積階段が検出された。石段には幅50cm前後の石材が用いられ、その隙間には拳大程の石を詰め頑丈に造られていた。一方多聞跡の西側には敵見櫓跡から本丸跡下段に降りる階段がある。「勢州松坂城図」には幅の広い階段が描かれている。階段上部の盛土には階段や裏込めに使われていたと思われる多くの石材が含まれており、このことから規模の大きい石積み階段であったことが伺える。

(5) 北廻多聞跡

北廻多聞跡は、敵見櫓北続多聞跡の北端から直角に西方向に延び、金ノ間櫓跡と接続している。規模は上場で幅1.8～2.1m、長さ29.4mあった。石垣の高さは南の兵部屋敷跡側で約1.8mあったが、北側の高さは5m以上あり、さらに東に向かって徐々に高さは増し、最も高い東端では5.7mにもなった。多聞跡での石垣石積みの工法は天守跡と同様である。石材も敵見櫓北続多聞跡と同種である。北辺と南辺との石垣の間には土もかなり混じっていたが、人頭大から拳大の割石の裏込め石がしっかり詰められていた。敵見櫓北続多聞跡との接続部の兵部屋敷跡側の入隅部の石材は外から見えている部分だけで奥には続いていなかった。敵見櫓北続多聞跡との接続部には埋め込まれた石垣がなく、両多聞は一体として築かれたようである。

金ノ間櫓跡の近くの兵部屋敷跡側からは、石垣に沿った多聞跡に西向きに登る石積階段が検出された。階段は石垣の外に附属するのではなく、多聞の中に組み込まれるかたちであった。幅0.6mの7段で、つくりは兵部屋敷跡から敵見櫓跡に通じる石積階段と同様であった。

兵部屋敷跡の礎石面と同じ所では北廻多聞跡の石垣に沿って1列に並ぶ礎石列が検出された。また、礎石列は敵見櫓北続多聞跡の梁方向の北から2番目の礎石列の延長上にある。この敵見櫓北続多聞跡の北から2番目の梁方向の礎石列に使われている石の大きさは、他のものよりもひとまわり大きく、地中に深くしっかり固定され、礎石間には拳大程の石が並べられる等、他の礎石列とは異質であった。「勢州松坂城図」では、敵見櫓北続多聞跡の幅が3間(6m)、これに対して北廻多聞跡は2間(4m)とあるが、石垣間の幅だと2mしかない。ところが、北辺の石垣からこの礎石列までの距離はちょうど4mあり、2間ということになる。以上の事から石垣に沿って並ぶ礎石列は、北廻多聞跡の礎石の一部と思われる。

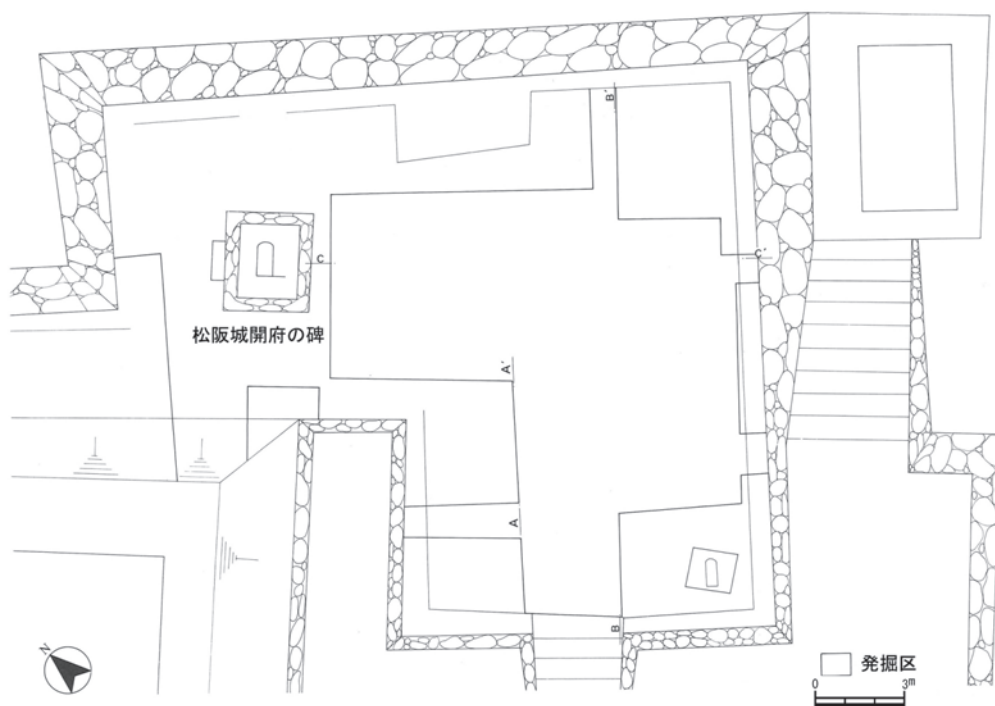
(6) 金ノ間櫓跡

調査時の金ノ間櫓跡は鍵形で、南側には階段がついているが、「勢州松坂城図」では長さ11間、横6間の長方形と記され、階段は記載されていない。規模は北辺22m、東辺19m、階段の付いている南辺は12.5m、北廻多聞跡に接続する辺は10.5mであった。鍵状になった凹んだ部分は、南辺9.5m、西辺12mを測る。北辺から東辺にかけての石垣の高さは6mであった。この部分での裏込石の幅は他所より広く、石垣最上段では石の先端から3～4mにも及んでいた。屋敷側の石垣の高さは1.6～1.9mであった。本櫓跡の上面の高さは天守跡より2m弱、敵見櫓跡よりも0.7m低かった。

石垣の積み方は、天守跡とほぼ同様であった。ただ、北辺から東辺にかけての石材は天守跡のものよりやや丸みが少ない。

南側に張り出している部分の中央付近において、北辺の石垣から南に13～14mの所に幅40cm前後の石が積まれていた。石積みの北0.5mまでは版築されており、その北には6m余にわたって人頭大から拳大の集石が認められた。集石の上面はおおよそ標高35.1mに一定していた。集石や集石と石垣との間の版築等は、天守跡の様子に類似していた。一部が多聞跡と接している辺の幅は約13mであり、「勢州松坂城図」にあるところの横6間(約12m)に近く、検出した石積みの位置も横幅に近い位置にあることから、南側に張り出している部分は、後世付け加えられたり、改造されたりしたものであるとも考えられる。南側に張り出した部分の石積みは矩を設けず、直に積まれているところなどは、他の表面に表れている石積みの様子とも異なる。ただ、張り出しの部分においての裏込め石は石垣の先端から1m程認められるし、石垣最下段は東方向に下がっていく地山に合わせて、東寄りほど地中深くに埋められ、確実に地山の上に置かれていた。付櫓跡ほどしっかりはしていなかったが、石垣最下段と地山とは確実にかみ合っていた。この部分での石垣の築き方は、金ノ間櫓跡や付櫓跡の東辺に続く後世付け加えられた石積み階段が、後世の整地層の上に築かれたりしているのとは明らかに違っていた。以上の事から、南の張り出し部分は後世付けられたものとしても、築城時に近い時期に付けられたものと思われる。

なお、金ノ間櫓跡においての礎石はまったく確認できなかった。



金ノ間櫓跡略測図

(7) 兵部屋敷跡

兵部屋敷跡は、上水道の配水池設置のため、東西30m×南北20m×深さ1.4mにわたり、地山であるシルト層まで大きく掘り込まれていた。この遺構は破壊され、消滅していると思われたが、6ヵ所で試し掘りを行ったが、遺構や遺物は何も確認できなかった。ただ兵部屋敷跡縁辺部において、排水溝跡、礎石列、石畳等の遺構が確認された。



兵部屋敷(大広間)跡実測図(1:200)

① 排水溝跡（溝B）

敵見櫓北続多聞跡の石垣に沿って溝跡Bが検出された。幅は底で0.4～0.5m、深さは約0.4mあった。西側の壁は多聞跡の石垣を共有し、東側は一辺50cm、厚さ20cmほどの石を2段に積んで壁にしていた。底は一部を除いて土であった。北廻多聞跡の部分では、一辺約0.8mの断面方形の暗渠になって、石垣の外に口を開けていた。暗渠の部分及び暗渠の入口付近の底には表面平らな石が敷かれていた。側壁等の石材はほとんどが自然石であったが、中央付近と暗渠部分の入口東側の壁には、宝篋印塔の基礎の部分が使われていた。溝は暗渠の方に向かって、緩やかに傾斜していた。

暗渠部入口より2.5m南側で溝Bに垂直に接合する溝跡を検出した。この溝のつくりや規模は溝跡Bと同じであった。この溝は、配水池の配置によって破壊され長さ1.5m程しか現存していなかったが、本来はずっと東方向に延び、この溝以南に兵部屋敷が建っていたものと思われる。溝Bに向かって緩やかに傾斜していた。

溝Bは兵部屋敷跡と敵見櫓跡とを結ぶ石積階段にぶつかり、これ以东は敵見櫓の石垣に沿って延び、付櫓跡にぶつかる所で切れていた。敵見櫓の部分での溝は幅0.4～0.5mと規模は多聞跡の部分と同じである。しかし、片方の壁を石垣と共用せずに、石垣側の側壁は0.5m前後石垣から控えて、地山を削る等整地した上に築かれていた。石材には多聞跡の部分の溝の側壁の石より、ひとまわり小さいものが使用されていた。底は地山で、岩盤あるいは砂質の堅い土になっていた。敵見櫓跡の北東隅部下には東西3.5m、南北2mの溜まりのような部分があった。側壁の石はそのほとんどが平らに削った地山の上にただ置かれているものが多いなど不安定で、残存状況が多聞跡の部分よりも悪かった。

② 付櫓跡の石垣下石列

敵見櫓跡から付櫓跡にかけての、兵部屋敷跡側石垣最下段の底面の高さは、屋敷跡の礎石面より高い。その高さは敵見櫓跡から付櫓跡に向かって徐々に高くなり、最も高い付櫓跡の部分では屋敷跡の礎石面よりも0.5mも高くなっていた。付櫓跡の石垣の下には石垣から0.5m程控えて、石垣に沿って石が一行に並べられていた。これらの石は、屋敷跡の高さまで地山を削って平らにした後、並べられたものである。石列の石垣側の地山は削られて垂直に落ちていた。石垣の最下段底面を隠すため当初一行に並べられた石材は、石垣の根石の高さ辺りまで積まれ、石垣との間は犬走状になっていたと思われる。敵見櫓跡部分の下にある溝が石垣より控えて造られているのも、石垣の下の地山を隠すため、石垣と溝との間に土等を詰めて犬走状にしたためと思われる。

③ 排水溝跡（溝A）

付櫓跡の東方で溝の痕跡が所々に認められた。幅は0.3～0.4mで、側壁には石が配され、底には一部に表面平らな石が置かれている他は、粘質の土が敷かれていた。溝は建物に合わせて配されていたためか3ヵ所で直角に折れ曲がっていた。部分的には建物の雨落溝としても使用されていたことも考えられる。石材には一辺20～30cmの自然石を使用していた。

④ 礎石列

兵部屋敷跡の礎石は、兵部屋敷跡の西隅に当たる敵見櫓跡に続く石積階段の下辺りに集中して検出された。また、北廻多聞跡に沿って1列に並ぶ礎石列が検出されたが、これは多聞跡に伴うものであると思われる。

西隅で集中して検出された礎石は、東西南北1m間隔に並ぶ敵見櫓に続く石積階段付近のものと、その他のものとは大別できた。その他の礎石は東西方向、南北方向共に2m間隔、あるいは東西・南北の内一方が2m、もう一方が1m間隔に並んでいた。石材には上面平らな割石あるいは自然石を利用していた。大きさは幅30cm前後、長さ50～80cmと多聞跡のものよりも一回り大きかった。どの礎石も地中にしっかりと埋め込まれていた。

⑤ 付櫓跡下の遺構

付櫓跡の北側に幅40cm、深さ10cmのJの字型になっている溝状遺構を検出した。付櫓跡北側の石垣に対して垂直方向に3.2m直線に延び、この中央付近から南東方向にやや弓なりに3mほど続く。南東方向は攪乱を受けているため、溝状の遺構がもっと続くのか、現状通りとぎれてしまうのか不明である。側壁には幅30cm、長さ50cm、厚さ10～15cmの石が一段一列に並べられていた。溝状の底は砂質の土であった。この遺構の3ヵ所と中央の1ヵ所では、側壁の上に表面平らな石が置かれていた。これらは屋敷跡の礎石列に続くものであり、礎石の一部であると思われる。

この遺構を覆うように、大量の瓦が出土した。瓦のほとんどは平瓦であり、丸瓦、軒平瓦、軒丸瓦はごく僅かであった。遺構上の瓦は東西4m×南北2mの範囲で、規則正しく南北方向に7列、屋根を葺いたように重なりあって出土した。瓦は遺構面の直上から検出されており、倒壊した何等かの建物の瓦の一部である可能性がある。

⑥ 石畳

金ノ間櫓跡の南に南北に長い石畳が検出された。主に一辺50～30cmの表面平らな石が敷かれ、大きい石の隙間には小さい石が詰まれるなど丁寧なつくりになっていた。石畳は幅1.3m、長さ4.0mが現存するだけであるが、造られた当時はもう少し幅もあり、南北にももっと延びていたものと思われる。西端の石1列は石畳の上面より0.1m前後高くなっており、西の端を示しているものと思われる。

(8) 本丸井戸跡周辺

井戸跡の北側から東側にかけて、屋根のない2本の柱と扉だけの塀中門があったと考えられる柱穴2、柵と考えられる柱穴6、排水溝とこれに続く暗渠排水溝を検出した。

① 塀中門跡

天守跡の東から井戸跡にかけて集石が検出され、門跡はこの集石の北端に位置していた。門跡の柱穴は東西方向を主軸に2つあり、柱間は2.0mであった。西側の柱穴は直径0.15m、深さ0.25mで、穴の周辺には小さい石があった。東側の柱穴は直径0.3m、深さ0.15mで、穴の周辺には人頭大の石が、底には一面に拳大の石が置かれていた。門跡の周囲の石は表面平らで、石畳のようにも見えた。なお、門跡の周囲が鉄管埋設等によって攪乱を受けていることもあって、この門跡に直接繋がる塀跡等の遺構は検出できなかった。

② 柵跡

集石の中に6ヵ所石のない部分があり、そこに柱穴が確認された。柱間は1.5～2.0mであった。柱穴の直径は約0.1～0.2m、深さは0.15～0.4mであった。柱穴の周囲0.2～0.5mには、石がなく土のみであった。この柱列は、この部分が兵部屋敷の入口付近にあたること、柱列の軸が天守台北辺の石垣を東に延長した線上にほぼのつてくること等から、屋敷を囲む柵であったと考えられる。柵の主軸の方向は塀中門の主軸よりも、やや南に振っていた。

門跡、柵跡、集石からはごく少量の細かな瓦片しか出土しなかった。

③ 排水溝跡

排水溝は塀中門跡の東側から南に延び、幅0.25m、深さ0.15m前後の規模であった。側壁には石を一段配し、底には平瓦や表面平らな石を敷いていた。溝は南方向に傾斜しており、暗渠排水溝へと続いていた。現状では、溝の北端は門跡付近で切れているが、その先がどのようなになっているかは、攪乱を受けていて不明であった。

④ 暗渠排水溝跡

暗渠排水溝は井戸跡の北から、本丸上段東側の隠居丸に面した石垣まで続いていた。石垣の上方には一辺0.8m程の排水口を開けている。天井には幅1m、長さ0.7m程の大きい石が使われて

いた。入口付近には平瓦が無造作に置かれていただけで、開口していなかった。溝の底が入口付近では天井石の高さまで上がってきているようであった。門跡から続く排水溝は、入口付近の瓦の部分に流れ込むようになっていた。暗渠排水溝の周囲には一辺10～70cmの石が、ぎっしり詰まっていた。

3-4 遺物の概要

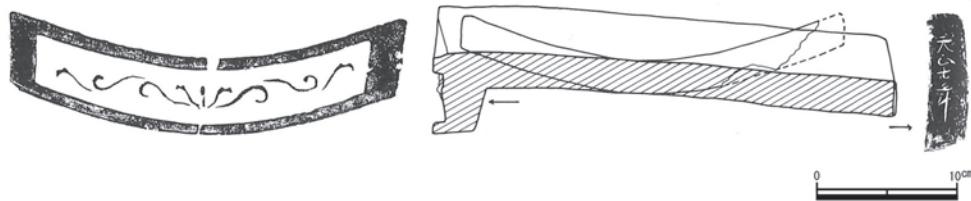
平成元年・2年度の発掘調査では、瓦、土師器、陶磁器、金属製品等の遺物が確認された。

(1) 瓦

遺構に伴って出土した瓦は付櫓跡の下や、暗渠排水溝付近等に限られていた。瓦が大量に含まれている層はどこも同じような瓦が含まれ、層位的な、あるいは場所的な特徴はなかった。

瓦で「天正七年」(1579)の銘がある、軒平瓦が確認された。瓦では唯一年代がはっきりしている。種類としては軒平瓦の他、平瓦、丸瓦、軒丸瓦、隅瓦、鬼瓦、鯨瓦等があり、これらの瓦の多くは、敵見櫓跡とこれに続く多聞跡との接続部、敵見櫓跡に続く石積階段の下の方群から出土している。量的には少なかったが、柵や暗渠排水溝の栗石の間にも混じっていた。

また、金箔を施したいわゆる金箔瓦が何点か出土したが、軒平瓦、隅瓦、鬼瓦に限られていた。軒瓦は黒漆を接着剤に、文様区の凸部のみに金が見られる。隅瓦は赤漆を接着剤に、文様区全体に金箔が貼られていた。鬼瓦は黒漆を接着剤に、目や口等に金箔が貼られていた。



「天正七年」の銘のある軒平瓦



鬼瓦

(2) 土器

出土遺構の土器としては、築城以前の壺、高杯など弥生時代の土器片が確認されたが、築城後の土器としては土師器が排水溝跡から出土している。

皿はすべて非ロクロ成形で外面底部には指押さえが確認される。皿の多くの口縁部にタール(油煙)がついていることから、灯明皿であったと考えられる。

皿以外である程度の器種を判定できたのは、焼塩壺と鍋である。

(3) 陶磁器

① 陶器

器種としては皿、椀、水注で、椀は天目・小型・丸型に分けられる。皿は長石釉の志野が多い。産地はほとんどが、美濃・瀬戸であると思われる。

また、播鉢も2点確認された。1点は備前で、もう1点は丹後の片口播鉢である。

② 磁器

磁器も数点みつかった。皿は白磁であるが、いずれも輸入品と思われる。

(4) 金属製品

金属製品としては鉄製品、銅製品と貨幣がある。

① 鉄製品

鉄製品のそのほとんどが釘で、他に楔と鏝とが出土した。出土した釘は、細かいかけらも合わせると50点以上になる。釘はすべて断面方形の角釘で、そのほとんどが頭部が巻き込みになる頭巻釘である。頭巻釘の頭部は脚部上端の間近に鑿を打込み、めくれあがった部分を槌で板状に叩き出して作っていると思われる。脚部の断面は一边1～0.3cmといろいろな太さの製品がある。長さについても完形品はないが、様々であるようである。釘の多くは、付櫓跡下等3ヵ所の瓦群の中に交じって出土した。

楔は1点のみである。頭部付近の断面は1.9cm×1.7cmの四角形を呈している。中央付近から長辺の両面が徐々に細くなり、先は尖っている。長さは3.6cmである。頭頂部は叩かれてやや外にはみ出しており、使用されていたものと思われる。金ノ間櫓の東側の裏込め石に交じって出土した。

鏝は6点が出土しており、体部を挟んで脚が両端に付いている。体部と脚部は一体で、脚は向かい合っているが平行ではなく、それぞれがやや外に開いている。脚部は付け根から両側面が細くなっていき、先端は尖っている。鏝の内1点は金ノ間櫓跡の土中の集石から、その他は北廻多聞跡に近い溝Bの埋土中から出土した。

② 銅製品

銅製品は、すべて長押に付けられる釘隠しである六葉金具の樽の口、菊座、六葉座といった部品である。製品すべて表面の見える部分には金箔が施されている。

菊座はすべて一重の菊花型で、直径は4～5cmある。中央には釘穴があり、ここから周縁に向かって、放射状に線がはしる。周縁には波状に刻みが入れている。断面はアーチ状を呈している。銅の円盤を菊座の形に彫り込んだ台にのせ、叩いて形作り、後で周囲の壁を刻んでいる。

六葉座は文字通り六角形で、対角線の長さは12cmである。周囲は折れ曲がり0.8cm前後の高さがある。周辺の6ヵ所には均等に猪の目、すなわち心臓形の透かし孔がつけられている。透かしはやや横に細長い。中央には釘穴があいている。

樽の口、菊座、六葉座は一体として使用されたものである。今回検出された六葉金具の材料である銅板の厚さは約0.1cmである。

③ 貨幣

貨幣は3点あり、1点は天守跡の北辺の版築された土の中から、2点は天守跡の集石の表面から出土した。天守跡の北辺のものは宋銭の元豊通寶、集石からのものは国内銭の寛永通寶である。

(5) 石製品

石製品には五輪塔・宝篋印塔・石棺・硯石の一部がある。

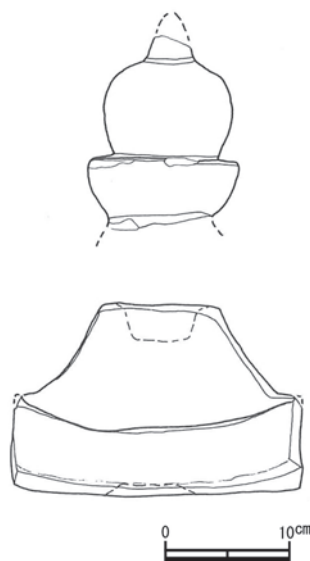


貨幣拓影

① 五輪塔

五輪塔は一石五輪塔の空・風部と別個体の火輪部が見つかった。空部の最大径は10 cm、風部は高さ5 cm前後、最大径が10.6 cmを測る。材質は砂岩系で、北廻多聞跡の裏込め石に交じって出土した。

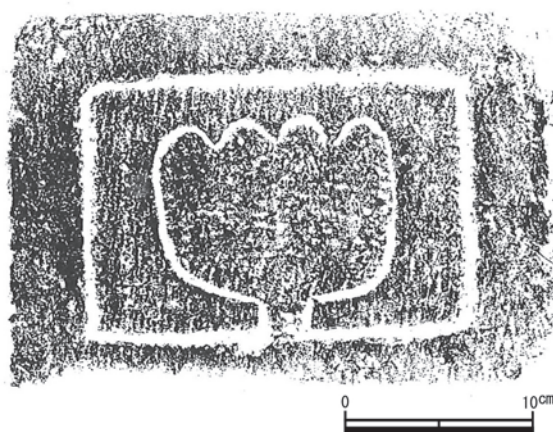
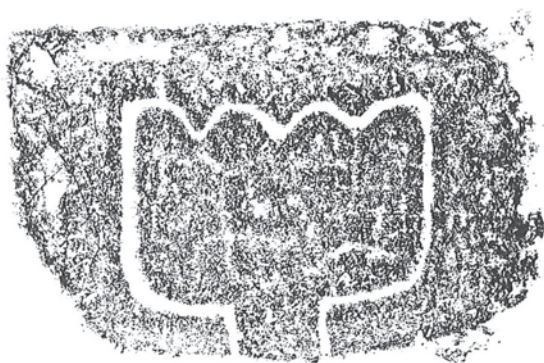
火輪部の軒幅は23 cm前後、高さは14.8 cmを測る。上面の中央部には上辺6センチ前後、下辺4.5 cm前後、深さ(高さ)2.9 cmの風輪部を差込むための穴が刳られている。下面の中央部にも上辺4 cm前後、下辺7 cm前後、深さ(高さ)1 cmの穴が刳られている。下面は弓状に反っている。材質は花崗岩で、天守跡の東側の裏込め石に交じって出土した。



五輪塔実測図

② 宝篋印塔

格狭間を配した宝篋印塔の基礎の部分が見つかった。



宝篋印塔拓影

③ 硯石製品

その他石造品の遺物として硯石の破片が1点付櫓下の瓦群に交じって出土した。